

〈資料〉

受験体験記からみた小学校教員検定合格者のライフヒストリー（２）

内田 徹*

１．緒言

本資料は、昭和戦前期に小学校教員検定・試験検定を利用して免許状を取得し、その後、教員となった田口ハル（1915～2008年）の手記の第二報である。

この手記は、田口の遺族が保管しており、2014年１月に筆者が複写および聞き取り調査の機会を得た。400字詰原稿用紙96枚、冒頭に「39才」と記入されていることから1954年ころに書かれたものと思われる（表１）。

表１ 田口ハルの手記「実話 苦闘」の目次

生い立ち・・・・・・・・・・	1	教育道に精進・・・・・・・・・・	39	退職・・・・・・・・・・	71
勉学の動機・・・・・・・・・・	2	正教員合格・・・・・・・・・・	42	夫の出征・・・・・・・・・・	74
勉学時代・・・・・・・・・・	3	転任・・・・・・・・・・	49	洋裁研究・・・・・・・・・・	82
上京苦学を決意・・・・・・・・・・	24	母の死・・・・・・・・・・	52	副業養鶏・・・・・・・・・・	86
就職難時代・・・・・・・・・・	26	小学校教員講習・・・・・・・・・・	56	現在・・・・・・・・・・	91
小学校に奉職・・・・・・・・・・	29	母校に教鞭を取る・・・・・・・・・・	60		

第一報においては、「生い立ち」から「就職難時代」までを掲載した。そこでは、田口が17歳の時（1932年12月末）に目にした新聞記事により小学校教員検定の存在を知り、翌年から同検定受験のために講義録「高等女学講義」による独学をはじめ¹、埼玉県と群馬県の小学校教員検定を受験しながら21歳の時（1936年11月）に、群馬県から尋常小学校准教員の免許状を取得したことなどがわかった。さらに、手記にはないものの、1937年２月には埼玉県の尋常小学校准教員検定に合格していたことが調査の結果、判明した²。

第二報では、「小学校に奉職」から「母の死」までを掲載する。その概要は次の通り。

尋常小学校准教員の免許状を取得した田口は、22歳の時（1937年９月）に代用教員として勤務するようになった。1938年度『埼玉県学事関係職員録』には、南埼玉郡清久尋常高等小学校（現：久喜市立清久小学校）に代用教員として勤務する田口の名前が確認できる。

こうして代用教員として勤務するようになった田口は、1937年の冬休みから再び、小学

※浦和大学 こども学部

校教員検定試験受験のための勉強を始めた。当時の心境は次のように書かれている。

「奉職した直後は、希望を実現した喜びで何も思考する余地はなかったが、日が過ぎ行くにつれて、尋准だけでは任用替になった處で准訓導になるだけだった。この先何年たっても訓導として採用される日は来ない。」

こうして田口は、「訓導」となるために必要な正教員免許状を取得すべく小学校教員検定試験の受験勉強を再開したのであった。

当時、小学校教員検定試験は、尋常小学校准教員の他に、小学校本科准教員、尋常小学校本科正教員、小学校専科正教員、小学校本科正教員に大別され、試験合格者にはそれぞれの試験種別に対応する免許状が授与されていた³。

田口が次に目指したのは、小学校裁縫専科正教員の試験合格であった。手記によれば、尋常小学校本科正教員試験のうち裁縫など数科目は合格していたものの、「全学科合格迄には並大抵の努力ではない」ことから、小学校専科正教員のうち裁縫に科目を絞って受験することにしたとある。

これらの記述をもとに、『群馬県報』を調査した結果、1938年12月に実施した「小学校専科正教員試験日時割」⁴が実際に掲載されていた。なお、当該試験合格者を掲載した『群馬県報』は発見することができなかったものの、1940年度『埼玉県学事関係職員録』では田口が北埼玉郡種足尋常高等小学校（現：加須市立種足小学校）専科訓導として勤務していることが確認できる。

また、手記にある「転任」とは、1939年度『埼玉県学事関係職員録』によると北埼玉郡屈巢尋常高等小学校（現：鴻巣市立屈巢小学校）への転任であると考えられ、准訓導として勤務していたことが確認できた。上述の1940年度に専科訓導となるまでに、埼玉県から小学校専科正教員の免許状を授与されたと考えられる。

以上、田口の手記は、教員免許状の上進過程やその当時の心境を克明に記しているだけでなく、その内容を『群馬県報』や『埼玉県報』、『埼玉県学事関係職員録』等の公的資料によって記述内容を裏付けることができる。

本資料は、初等教員検定試験制度の運用実態および受験生の側から見た小学校教員検定制度の意味の解明という初等教員検定史研究の課題に迫る基礎的資料を提供する点において研究進展の一助になると考えられる。

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（17H02660、基盤研究（B）「戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の果たした役割に関する歴史的研究」（研究代表者・丸山剛史））の助成を受けたものである。

注

- 1 当時の埼玉県北埼玉郡田ヶ谷村（現：加須市）周辺における女子教育の状況については、新井淑子『埼玉の近代教育史と不動岡高校百年の歩み』（埼玉新聞社、2011年、pp.145～158）に詳しい。
- 2 『埼玉県報』1020号、1937年2月16日、p.263。
- 3 国立教育政策研究所『日本近代教育百年史5 学校教育（3）』（p.730、執筆者は林三平）など。なお、師範学校卒業者に関しては、師範学校長が府県知事に申請し、卒業と同時に小学校本科正教員の免許状が授与された。
- 4 『群馬県報』1387号、1938年10月7日、pp.1300～1301。

凡例

- ・資料は、原則として、仮名づかい、送り仮名、句読点は原文のままとした。ただし、引用資料中、繰り返し符号が用いられている箇所だけは、繰り返される文言を挿入し記した。
- ・判読難字は■で示し、空欄は□で示した。空欄にルビが付された字句はその通り記した。
- ・誤植、誤用あるいは疑義のあるものには「ママ」をつけた。

資料

● 小学校に奉職 一

昭和十二年九月十五日、待望の辞令は私の手に郵送された。

「埼玉県〇〇〇郡〇〇尋常高等小学校代用行員ヲ命ズ 月俸〇拾円給与」

嗚呼、想へば三伏の暑さと戦ひ、厳寒の候に堪へ、あらゆる試練と苦悩を克服し、目的達成に奮闘努力したのも、決して無駄ではなかった。そして、苦しい過去の幾年を顧みて、無量の感に打たるゝのみだった。

満足そうな父の顔、包み切れない喜びに、涙を流す母の瞳、今でも脳裡の奥深く刻まれて永遠に忘れる事は出来ない。

早速父は近所の自転車屋で婦人車を購入して呉れた。そして父と一しょに、熊谷の八木橋へ靴を買ひに行く。途中、学校帰りの幼い子供達に逢ふと、只嬉しく、自転車もかるい。

二

翌日私は父に連れられ、早朝叔父の家を訪問した。叔父も叔母も我が事の様に喜び、私の前途を心から祝福して呉れた。そして叔父と、父と三人して赴任校に向かった。

赴任校は叔父の家から約四■、県道から約百米位離れた、其の頃としては、大きい学校の方だった。校門に入ると、児童達が小声で、
「今度来た先生なんだよ。」

と言ひ乍ら、ていねいに頭を下げる。嬉しさと、恥ずかしさで、一種言い様のない気持ちになって来る。

職員室に入ると、校長先生始め、全職員が朝のあいさつを交してゐるところだった。校長先生に辞令を見て貰ひ□□すると、

「毎日待って居ましたよ。体格もいいし、申し分なしです。すぐなれるから、しっかりやって下さい。」

と激励された。そして全職員に紹介され、〇〇校の職員として、末席を汚す事が出来た。

それから数分後朝礼が始まった。校長先生が朝礼台に上って、児童一同に、〇〇先生の病氣休職と、その後任として、私が赴任した事を話された。代って私が新任としての□□だった。朝礼台に上って、職員生徒の前で□□するのは、之こそ生れて初めてだった。高鳴る胸をおさへて、朝礼台の上に立った。数百の視線が、台上の私に注がれる。すっかり度胸をすえる。そして真摯な状態で黙礼をする、其の時の□□を大体おぼえてゐるが、

「只今、校長先生の御照会にあづかりました〇〇です。今度この学校の教員として参った者です。学問浅く、何んにも分らない者ですが、校長先生始め、諸先生の御指導と、御鞭撻とによって、皆様と共に学び、共に遊び度いと思ひます。どうぞ宜敷しく御願致します。」

と思ったよりすらすら言へてほっとした。

三

受持は、四年の南組、男女合併のクラスであった。そして前の先生が、久しく病気だったので、北組の女の先生が合併して指導してゐた。私はなれる迄、一週間位、両方合併のまゝ、

北組の先生の教へるのを見学しつゝ、教へてみたりする事になった。

其の日は午前中授業見学、午後は校長先生に連れられて、役場と学務委員の家庭訪問をした。三時間目が終わった時だった。南組の生徒らしい四五人が、恥かしそうな格好をして「先生先生」

と私の手を握る。後から後から女の子も、男の子も寄って来る。力一ぱい抱きしめてやりたくなって来る。今日は初日の事とて早くしまい、四時頃家へ帰る。近所の人達と逢ふのが何となく恥かしい。

家へ帰ってみると、両親が私の帰りを待ち切つてゐた。そして父は「今朝、朝礼台へ上つて□□する時、万^{あい}一途中で話が出来なくなつて了つては……と、どんなに心配したかわからなかったが、すらすら言へたのでほつとしたと言って喜んでゐた。学校の大体の様子を話したので、母も非常に安心した。夜になると、恩師や同学の友に奉職を知らす手紙を出した。こうして希望に満ちた教員としての第一歩はふみ出されたのだった。

朝は早く起きる。そして母と共に□^{すい}事もやれば掃除もやった。急いで仕度して、三里近い道を自転車^{すい}を走らせるのだった。

一週間の授業参観中、北組の先生は「一日に一時間位授業をやつて見て下さい。もし思はしくない處が有りましたら、いくらでも一緒になって研究しますから。」
と言つて下さる。

赴任して三日目、初めて教壇に立った。国語だった。初めて児童の前に立つて、本当に責任の重且大なるを感じずには居られない。今でも忘れられないが、北組の先生の前で授業するのが恥かしくて恥かしくて堪まらなかった。

自分の力をすっかり見抜かれる様な気がして、一時間が随分長く感じられた。終りのベルが鳴ると、ほつとしたのだった。

またたく間に一週間は過ぎた。そして南組の生徒と共に、隣の教室に修まった。今夜こそ本当の先生になった様な心地がした。

休み時間になると子供達が「先生先生」

とテーブルの周囲によって来る。赤い着物を着た子も、鼻をたらした子もみんな可愛い。「先生庭へ出て遊びませう。早く、早く。」

と無理矢理右の手を引っぱるセーラー服の背の大きい子、左の手にぶら下がる目のくりっとした赤毛の子。

「先生は未だ来たばかりで、恥かしいから、もう幾日かたったらみんなと遊ぶからね。」

と言っても、子供達はそんな事など聞かうとはしないで、とうとう廊下迄引きずられ乍ら出て行く。私の手を持ちはぐつた二三人の児童は、昇降口へ先まわりをして、きちんとズックを揃へて待つてゐる。

この学校では共学共遊^{けい}と言つて、休□時間に、先生が格別の用事のない限り、児童と共に

庭で遊ぶ事になってゐた。想へばこの子供達は、そうした教師の愛情に長い間欠けてゐたわけだ、だから新任の私を、どんなに母に接する様な気持ちで待ってゐたかわからないのだ。彼等にとっては、漸く人並みの生活が又初まったわけだから、むりに私の手にぶらさがるのも当然だった。

四十六名の子供の名前も、四五日で大抵わかって了ふ。

又この学校は実に整然たるものだった。一例を挙げると、次の様だった。

朝礼が終ると全職員、職員室から児童の出席簿を各教室に持参する。そして一時間目の授業が終ると一年から高二迄十四の出席簿がずらりと並ぶ。新旧両校舎がピカピカ光って、之が六百余人の生徒が毎日学んでゐる学校かと思はれる位だった。

一日増しに学校に慣れて、毎日が希望と喜びに満ち満ちてゐた。音楽室からは、「勝って来るぞと勇ましく」の軍歌が毎日の様に聞えて来る。

九月下も下旬になった。放課後になると、皆運動会の準備で懸命だった。行進曲にも何にも軍歌を用ひる様になった。各学級には、一二人づゝ、遺族の子供が居た。西南組にも二人居り、一人は両親なく、頼みにしてゐた兄は戦死と聞いて、可哀想でたまらなかった。

それでも、其の子がよくひねくれもせず、すくすくと伸びてゐると思ふと、ふびんでたまらない。

夕方の四時になると、毎日職員会、ジリジリとベルの音を聞くと同時に、職員が競走の様に早く集合する。こんな光景は他校ではとうてい見られないと思った。そして今日一日の反省と、明日の予定等、校長中心に語り合ふ。お茶が済むと校長は、毎日同じ時刻に「〇〇先生御帰り下さい、遠いんだから、遠りよはいりません。」

と言って下さる。でも毎日の事なので、そうした校長の言葉を毎日甘受する事も容易ではない。遥かなる異国に奮闘する勇士を思ふと時々「今日は叔父さんの家へ泊るんです■■大丈夫です」と悪いと思つてもついうそを言って了ふ。そして遠い道を平気で家へ帰る。

十月十九日は運動会だった。赤とんぼがすすいすいとび交ふ校庭で、澄み切った大気を胸いっぱい吸って、楽しい一日を過す。

運動会も済んで、放課後になると、幾分精神的に楽になった。子供達と掃除を急いですませ、後は自由な時間だ。明日の教案作製、教材研究が済むと、音楽室へ行く。日一日幾分なり共、向上して行くと思ふとうれしい。

其の頃日支事変はいよいよ激しく、よく〇〇^{久喜}駅迄児童を引率して出征兵士を見送った。各戸に国旗を掲げ

「勝って来るぞと勇ましく」

と児童達の^{かんこ}□呼の声と、万歳に送られて、兵士達は、家と最愛の妻子や両親を残して、潔く出征して行った。

四

三学期も終りに近づいた。四十六人の生徒の個性も、大体はわかって来た、と同時に各自

の家庭の状況も子供を通して大体わかる。約七ヶ月間、自分の可愛い、子として、又母として育てて来た子供達も、もうすぐ五年に進級だ。すっかり私の型にはまって、すくすくと伸びつゝある子供達を、他の人の手に渡すのかと思ふと、実にやり切れなくなって涙が湧いて来る。単なる教師対、生徒ではなくなって来る。

「仰げば尊し我が師の恩。」

高等科の生徒が、卒業をあと数日に控えて音楽の練習をやっている。過ぎた過去が偲ばれて懐かしい。

生徒の一覧表を作った。慎重に考へて八名の優等生を決める。一番から七番迄は、そんなにむづかしいと思はなかったが、八番と九番では、どっちを■すかに、随分あらゆる角度から考へた。そうしたら、去年の優等生が落ちて了った。然し成績によってどうにもならなかった。

● 教育道に精進

卒業式の日には、校庭の桜も、やっと二分咲き位だったが、四五日急に温かい日が続いたせいだろうか、入学式の四月六日には満開に近かった。

母親に手を引かれ、可愛い、ランドセルをしょったあどけない一年生、急に姉さん気どりになった二年生、皆希望と歓喜の絶頂だったに違ひない。

今年は二年生の担任だった。全職員十五人其中、一西担任の先生は、六十に近いおぢいさんだった。女教師六人、中には若くて未亡人になって了った気の毒な方も居た。校長先生は師範卒業以来、本校に勤務しつゝ校長になった、温厚篤実な教育家として有名の方だった。全職員中最年少で、浅学非才なのは私だった。然しかくの如き年令の差と、教育の相異は有っても、全職員校長中心に、実にわきあいあいの中に教育道に精進してゐた。そして今年から二年間に亘って、県の算数指定校として活躍する事になってゐた。

新学期早々、週一回づゝ低学年と言っても二年生から研究授業が始まった。未だかつて経験のない私に、校長先生は、

「〇〇先生は未だ日が浅いんだから、よく先生方を見せて貰って最後にやって下さい。」
と言ってくれる。底学年からの一言を聞いた時、「どうしよう。」と思った。

研究授業と言へば、全職員の目前で一時間の授業をやらねばならぬ。大先輩の前で、然も短い方で三年、長い方では四十年近いこの道の経験者である。奉職してたった半年余りの私には、余りにも重荷で有った。あく迄も校長先生が、影になりひなたになって下さると思ふと、益々この教育道に精進せずにはおられなかった。

研究授業が行はれると、其の日は授業に対する批評会をやる。いつもは午後四時の職員集合が三時になる。全職員がノートを持って職員室に集合する。すると其の日の授業者が国語をやったとすると、国語の教科書全部を全職員に渡し批評会が始まる。授業者は今日の授業の反省と、今後の御指導を御願ひする。すると各個人個人の発表となるが、それは物凄く、あく迄も真理の追求に、最後は全職員うって一丸となり、火花を散らすとは、この事かと思はれる事もあった。そして終了してお茶を呑んで帰る頃は、大抵八時に近かった。

こうした何か特別の行事のある時は叔母の家へ泊った。

七月初旬になると私の番が来た。教授法の研究と教材研究とに実際真けんだった。いくらおそまきであっても、大体人並に近い授業がやって見たかった。

心配してゐた研究授業も無事に済んで肩の重荷を下ろした様にのんびりする事が出来た。

● 正教員合格

一

教壇に立ったとはいへ、最底の免許状である。奉職した直後は、希望を実現した喜びで何も思考する余地はなかったが、日が過ぎ行くにつれて、尋准だけでは任用替になった處で准訓導になるだけだった。この先何年たっても訓導として採用される日は来ない。去年はとうとう上京苦学を決意したり、就職等で貴重な試験勉強を怠って了った。尋正をやりかけて、科目合格はしてゐたけれど、合学科合格迄には並大抵の努力ではない。

「好きこそ物の上手なれ。」

との諺の如く、やっぱり私の進路は裁縫である事を知った。そして目標は「裁縫専科正教員」へとひたむきに突進するのであった。

二

奉職して未だ日も浅い冬休みから、こつこつと勉強は始まった。学校に居る間は殆ど試験勉強をする余ゆうはなく、専ら家へ帰ってからやった。尋正の裁縫を受ける時学んだのが大変参考になったが、何としても専科であつて程度は遥かに高い。最近埼玉県で専科合格者は各科(裁縫、農業、工作、図画、体操、音楽があつた)で一人、多い科で二人位しかいなかった。然し検定は頭脳の良否もあらうが、「あく迄も固き信念と耐えざる努力」と信ずる私は何が何でも応試する決心をした。

六月の埼玉県施行の試験にはとても準備が出来ないので、八月群馬に遠征する予定を立てた。然し予定は立てたものの、一向にはかどらず、尋准、尋正とは打って変つてむづかしい。専科と言っても、教育もあり、又群馬県では、外に国語、数学、修身の三科目が余計になつてゐたが、小学校教員免許状所有者は応試する必要なしとなつてゐて幸だった。

裁縫は理論と実地と教授法に区分され、其の中理論は和裁、洋裁になつてゐた。今では洋裁と言っても嫁入道具の一つとして、習はぬ者はない位だが、昭和十三年頃は殆ど習ふ人はいない位だった。和裁の理論はどうやらわかつた。然し数多い洋裁の製図は、夜だけの短い時間ではどうする事も出来なかつた。日曜日には、朝から裁縫の実地をやつた。和裁は二三年前、隣町の裁縫所へ少し通ひ、又母が若い時近所の娘に教へてゐたので、少しは好都合だった。だけど和裁と言っても、男の袴の腰板の十〇留は、余りにもやゝこしくて、一番骨を折つただけに、今でも忘れられない。

洋裁の実地は、和裁以上にむづかしい。ミシンを一度もふんだ事のない私は、ミシンをふむけいこから初めねばならなかつた。丁度学校に一台有つたので、裁断して居いては、時々学校迄わざわざ行つて、教科書を見ながら縫つた。どうにか出来上つた時の嬉しさったら、本当に此の上もなかつた。

三

八月の休み中、こっそりと試験してしまいたい、と心に誓ったものゝ、思ふ半分も出来ずとうとう諦めて了った。

十二月五日、学校に病欠届を出して、明日の試験に応試すべく、懐かしい群馬師範に向かふ。上毛の山々は初冬の空にくっきりと屹立し、去る昭和九年十一月十七日、高崎乗附練兵場に於て、女青の一員に加はり、御親閲拝受の光栄に浴した感激も新ただった。

旅館に着くと、直ちに群馬師範に行き、受験票受領、宿に帰って又すぐ参考書をひもとく。明日は決戦と言ふに、どうしてゆっくり休む事が出来よう。一通り参考書に目を通し、寝についたのが、草木もいとふ二時頃だった。

翌六日、運命の左右さるゝ日だった。心身を清めて試験場に向ふ。あゝ、こうして、■かの異郷迄試験に來たのだ。学校へは病欠にして置き、児童達は、私の居ない三日間をいかに過ごしてゐるだらう。職員一同もどんなに心配してゐるだらう。もしパスしない時を考へる。次から次へと湧出る雑念、妄想の支配に困って了った。時は迫り、午前九時試験開始。裁縫理論。九時——十二時迄。教育、午後一時——三時、七日は裁縫実地。午前八時——十二時迄。

裁縫実地——昨日の裁縫理論も教育も思ふ存分書いたので、今日の実地試験にのぞむはり合ひがあった。

午前七時、早めに旅館を出て、実地試験場である女子師範に向ふ。凍りつく様な冷たい朝だった。遥かに赤城山がそびえ、何んとも言へない■光だった。

試験開始のベルが鳴る。続々と集ふ受験生は講堂に入り切れず、次の教室にも一ぱいだった。私は講堂の方だった。問題は、

「与へられたる布にて、図にある様な洋服を作製せよ。」型紙も提出の事。

とあった。七八才位の女子の洋服だった。人絹のひどくつるつるした、水玉の生地だった。時間迄にやっと仕上って提出したのが、私と交じへてた三人しか居なかった。

試験は終った。熊谷から來た■子さんと高崎の観音様を見学し、忠霊塔を拝し、帰路につく。神奈川の清流の調も、烏川のせゝらぎも只懐かしかった。

四

昭和十三年も恙なく終った。一月十八日、群馬県より裁專正合格の通知に接した。身体検査と口頭試問に出頭せねばならなかった。試験の時は、うそを言っただけで病欠にしてしまつたが、免許状が来ると極秘にする事は出来ない。

とうとう私は校長に

「十二月に三日間休んだのは病気ではなく、実は受験に行つたのです。もし受からない時には、恥かしい思ひをしなくてはならないと思ひ、悪い事とは知りつゝ、うそを言つて、誠に申訳有りません。でも御陰様で裁專正が受かりました。」

と言ふと校長は、

「それはよかった、よく専科が受かったね。まったく貴女の努力には感心しましたよ、其の

意気で今後も児童教育に邁進して下さい。」

と言ひ、

「二十三日に身体検査と口答試問に行くんですが、御暇頂きます。」と言ふと、

「結構です、しっかりやって来て下さい。」

と言って下さった。だまって、然もうそれを言って試験に行つて、それが結果がよかったから、後になって打ち明ける。こんなひきょうなやり方があるであらうか。校長先生は常に、「何事も善意に解釈」をモットーとして居り、「寛容」至れる方なので、一言も私をとがめなかった。私はうんと叱ってもらいたかった。

と同時に偽れる人生のいかに苦しいかを体験した。

五

二月十日、小学校裁縫専科正教員の免許状は下附された。

嗚呼、想えば長き年月だった。厳冬骨をもとほす深夜の燈下の下に、机にもたれしまゝ夜を明かしたのも幾夜？或は孤独の寂寥に堪え、宵の明星が幾度も可弱い乙女の涙を誘った事だったろう。若く再び来らざる青春も、恋愛も無ければ結婚もなく、果てしなく続いた茨の道だった。

● 転任

二月下旬になった。両親は、

「なれた處で、本当にいゝ学校で申し分ないが、何とかして近い学校に通はせ度い。」

とどうしても聞かなかった。今年ばかりではない。去年も異動を前に、どんなに口にしたかわからない両親だった。然し、やっと、数多い希望者の中から、辛うじて奉職出来たとなると、去年はとうとう言ひ出さず、諦めるより外なかった。然し私には全然転任の意志はなかった。でも今年は父母の切なる願ひを聞かないわけにはいかず、三月初旬、叔父を通して校長に転任希望を出した。校長は、
「手放すのは本当に惜しいが、何としても遠くて気の毒だから、近い處え転任出来る様尽力します。」

との事だった。転任希望は出したものゝ、どうしてこの子供達と別れられよう。去年の三月は進級なので止むを得ずだったが、別れたと言っても、同一学校内に毎日勉強してゐて放課後は、時々遊びに来ては喜んでゐた。だから、仕方ないと思つてゐた。然し転任となると、子供達がいじらしくなり泣けて来る。

四月一日、教員の大異動により、〇〇〇郡〇〇村尋常高等小学校に転勤を命ぜられた。家から一里、自分の村へと思つたのだったがそう希望通りになるものではなかった。

四月七日、桜花爛漫と咲く日、前任地〇〇校の告別式に参列した。

一昨年九月、全校生徒に向へられ、喜びに高鳴る胸をおさへて、この朝礼台の上に立った時の感激も、春光うらゝかな四月、〇〇神社への遠足、澄み渡った大空での運動会、想出は果しなく、走馬燈の如く、私の脳裡に甦る。

校長先生が児童に私の転任の報告をする。

「今日こそ泣かない、笑顔でお別れしよう。」

と心に誓って来たものゝ、やっぱり駄目だった。涙がはらはらと足下に落ちて来る。朝礼台の上に上っても思った半分も言えない。子供達のすゝり泣く声が、あちらこちらから聞えて来る。教室へは入って、受持だった児童にあいさつしようとしても、どうしても出来ない。かねて覚悟はしてゐたものゝ、別離の慈愛が、これ程迄とは思えなかった。

● 母の死

昨年十二月、東京の病院に入院手術した母は、非常に経過良好で、家内一同喜んでゐた。然しそれもほんの束の間だった。

四月下旬になると、何んとかなく健康勝れず、五月中旬にはとうとう病床に呻吟する身となって了った。近くの医師に往診してゐるが、一向快方に向かず一日増しに衰弱して行つた。そして五月二十日には、再び東京の病院へ入院する身となって了った。

入院後は父と私と看護婦の三人つききりで看護に當つてゐた。二十六日になると父が、「余り長くなるので家が心配だから」と言つて家に帰った真夜中だった。普通に眠つてゐた母の病状が突然悪化して了った。宿直の医師と看護婦七八名がかけつけてくれる。

父には直に至急報を打つた。

辛うじて生命だけは取止めたものゝ、脈の結帯はおびたゞしく、心細くて母の顔を見るのさへ恐ろしい位だった。其の時医師は既に母の死を宣告して了った。

それから毎日、昼夜二時間毎に打つ強心剤、四時間毎に打つ□□糖、午後になると食塩注射かリングルを、すっかり衰弱し切つて、之が私の母の足かと思はれる様に細くなった足に、太い針で両もゝに、多量の注射液が注がれる。痛いのを我慢して、じっと目をつむつてゐる母、あゝ母を一時も早く全快させ度い、医師がいくら死を宣告したとて、どうして母が死ぬと思はれよう。きっときっと■■■の愛の力でもう一度母を全快させ度い！あゝ、この骨肉の情、愚かな私には、之と言つて表現する言葉が見つからない。弟妹三人近所に住む伯父につれられて、遙々上京して来た時は、もう母は非常に危険の状態に陥つてゐた。其の時母は、「みんながよく来たね。」

と、とぎれとぎれ言つたきり、涙にむせんで後の言葉が出なかった。

「之でももうよくなったので、じき帰れんだから、今日は伯父さんと帰っておとなしくしてゐるんだよ」

と父に言はれ、泣く泣く出て行く弟妹の姿が今でも忘れられない。末の弟は、まだ九つの時だった。

四月の転任で、校長先生も私と一しょだった。校長先生は、小学校当時の恩師で、試験受けるに度々御指導御願ひしたのは、この先生だった。何んにつけても本当にはゞかるところなく毎日が楽しく生活出来た。

校長先生が恩師だからと言って、甘えてゐたわけではないが、母の入院以来、すっかり欠勤して了った。母の死の四日前、校長先生から手紙が来て、

「余り長くなるから、来られるものなら、一寸でいゝから出勤する様に。」

とあった。私のせつない胸は干々に碎けた。私に取ってはたった一人の母、その母が、今、生死の境をさまよってゐる。どうしてこの母の枕辺が一步でも離れる事が出来るだらう。

七十に近い児童の日常を忘れてゐるわけではないが、今の私にはどうする事も出来なかった。だがとうとう父や叔父に励まされ、仕方なく翌朝は学校に出勤すべく車中の人となった。窓外の景色も只漠然として、何が何んだか一向わからなかった。車内の人の顔を見るのも、いやで堪まらなく、長い長い一時間だった。学校に行っても一寸も落付かず、一時間ばかりで帰路につく。

病院に帰って行くと、母が待ち切ってゐた。

「もうどこえも行かない様に」

と言って私の手をはなさない。それから三日目、想出は悲し六月十九日！たった一人の私の母は、夫と娘にしっかりと抱かれたまゝ、愛児の名を呼びつゝ、永遠に呼べど帰らぬ、黄泉の国へと旅立って了った。

嗚呼、私の母は逝って了った。最愛なる夫と愛児四人を残して、五十三才を一期として、はかなくも母の魂は永劫に地上を去って行った。

想えば転任により、家庭から近き学校に通って母を安心させたのも、本当に短い日月だった。けれども其の短い日月が、若くて逝った母えの子としての真実の姿を、暖かく胸に抱かせた事だったろう。

いばらなる浮世の波に、身も心も疲れ果ててたどりつく家庭、母親によって、大きな心に抱かれ、なぐさめて呉れるのは母親の外にない。女なれば女なる程、母親に対する愛着は激しいものだ。只々、広漠たる野を独り彷徨する思ひであつた。いくら泣いても泣いても帰らぬ母、諦め切れない■■■の苦しい心境だった。

然しいつ迄も泣いてはいられない。私より若くして両親を失った者を考へて見る。いじらしい弟妹を考える。こうした苦の人生の中にも、今日を一步一步開拓して行かなければならない。之が亡き母に対するつとめであり、やがては光明の世界を求むる姿かとも思われる。「人生を生き抜く事は容易な事ではない。」と必々と悟らずには居られない。然し、この苦の人生に打ち勝つて行くのが、私に与えられた運命だと思ふのだった。昨日の悲しさを捨て、雄々しく人生の岐路^きに潔く、新しき明日への達■に向かつて突進しよう。

(2022年5月19日受領)